

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.107

京町家通信 第107号 2016年7月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ <http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ● 京町家条例に向けたシンポジウム—これ以上町家を壊さないために

2016年6月4日、京町家再生研究会は京町家ネットの各組織とともに京町家条例策定に向けたシンポジウムを開催した。会場の京都文化博物館の別館は120名を超える参加者で満席になり、中でも不動産関係各社の関心の高さが表れていた。

この企画は、昨年12月門川京都市長に提出した「京町家の流通促進による保全・再生策に関する要望書」（『京町家通信』vol.104、2016年1月号）を広く市民・行政に訴えることが目的である。要望書を連名で提出した京都府宅地建物取引業協会の支援のもと、同副会長北川安彦氏、京町家情報センター幹事でもある西村孝平氏がパネラーとなり、その趣旨を熱心に語った。また、京町家友の会会長のデービッド・アトキンソン氏も超多忙なスケジュールを割いて参加し熱弁をふるった。京都市からは都市計画、町家担当の小笠原憲一副市長が参加、小島富佐江理事長のコーディネートでディスカッションを進めた。

我々は要望書で、これ以上町家を壊さず、町家のまま売り貸し、受継いでほしい。だから壊す前に京都市に知らせる仕組みを作ってほしいといった。すでに、情報センター加盟の11社はこの5年間に456軒の売買、411軒の賃貸、計867軒の町家を新たな住民に手渡した。コインパークになる直前に西村氏が救った町家があったという。借りたい、買いたい人が大勢相談に来ている。町家を壊して土地を売るなら壊す前に町家を売ってほしい。

戦後70年経った今、世代継承をめぐる古い常識が変わりつつある。戦前世代と違い、戦後生れ世代は家業も生家も継承しないのが当たり前、皇族方やお家元でもない普通の家族が町家を守り続けるのは難しい。経済、家族形態、暮らしぶりは大きく変わった。反面、我々の平均寿命が延びた分、継承の機会が遅くなり、古い常識が残った。それを断ち切ってすっきりしたい気持ちは分る。すっきりしないままに、空家は増え続けている。しかし、町家を壊してまですっきりする必要はない。上手な売買、賃貸をお勧めしたいのである。

だから一言京都市に知らせ相談する仕組みを作ってほしいと要望した。一方、自治連合会や地域景観協議会がその活動の範囲で空き町家を通知してくれば、市は一緒に所有者に働きかけて皆で相談できる。さらに、気になる町家を見つけた市民が「京都を彩る建物や庭園」に推薦すれば、選定・登録に進み、所有者に保存を働きかける。加えて、町家物件が持込まれた不動産事業者が市に通知することもできよう。北川氏は、この事業者による通知の仕組みを主張した。町家だと思った時点で、市の町家データベースを参照し、ID番号を確認することから自動的に市に通知される。

この通知の仕組みを、所有者の「町家除却届出の義務」とする条例制定は提案の骨子ではあるが、所有者の義務に限定する必要はないだろう。個人の所有権を侵すことなく、皆で

働きかける方法を探る方が、現代の市民社会にはより相応しく思われる。延べ千人の市民のボランティアで得られた町家データベースを活かすためにも、市には町家所有者にそれが町家であり、市と市民はその保存活用を薦めていることを告知する義務があると思う。

2007年に始まった新景観政策で町家街区には高さ15m以下で形態と色彩が町家に即したマンションが増えてきた。しかし、町家除却が止まらなければ町並みは悪化する。ある日突然、誰も知らずに町家が壊される。コインパークになって皆が気づく。その変化を調べてみると町並みが蚕食される様子がよく分る。やがて、一つも町家がないのに建築ガイドラインによるマンションだけが建並ぶ日の町並みは悲しい。高齢化が進み、多死社会に差し掛かった今だからこそ、増加する相続から町家を守る特別な努力が要る。町家の資産価値は高まった。壊さなければ損をする時代ではないのである。

実際、中小の町家は住宅や店舗、そして宿泊施設としての活用が普及した。町中の不動産屋さんが熱心に斡旋している。相続する方々にいいアドバイスができる。一方、大規模町家の活用は難しい。特に高さ31mが許される幹線道路沿いでは、マンション業者が高値で買い取っている。日々景観が美しくなっていく京都都心ではマンション需要が旺盛である。京都の町を知らない市外の大手業者にこそ、町家とその敷地を買取る前に市に通知するよう義務付けて欲しい。京都では市民・事業者・行政が一体となって町家の町並みを守る努力をしていることを知らせ、大型町家でもそのまま活用したい少数の企業があり、シェアハウス、町家ホテル、高齢者福祉施設、大学の町中キャンパス、美術館等として活用する努力する方途があることを知らせたい。美しい景観にタダ乗りするのではなく、京都の人々の努力に協力するビジネス・ルールを守ってほしいのである。

要望書を受けて、京都市都市計画局まち再生創造推進室は「京町家保全・活用委員会」を発足させる。推進室には町家担当の他、空き家担当、細街路（袋路）担当があり、空町家と路地の長屋再生・創造の様々な補助制度を整えた。この総合力を発揮し、これ以上町家を壊さないための決めの一手を編み出してほしい。

アトキンソン氏はその英国の家と比べ、ほとんど規制のないに等しい京町家の実状を嘆いた。美しい町並みには規制（ルール）がある。ルールに沿って住民が日々の努力を積み重ねることで美しい町並みが整うという。8割の市民が賛成した景観政策を進め、日本の文化首都として輝きを増す「町家の京都」を再生・創造するために、市民・事業者の力を結集させたい。再生研のシンポジウムは、参加者と共に町家再生の次なる段階を提起した。

＜宗田好史（京町家再生研究会副理事長）

活動報告 ● タイ王国訪問

東南アジアの報告も3回目、3月に訪ねたタイ王国の視察をレポートする。先行してマレーシア、ペナンを訪れていた大西清右衛門氏、小島理事長、宗田先生と17日の晩にバンコックで合流し、以降4日間、首都近郊の伝統工芸の現場を訪ねた。地元バンコック・フォーラムの活動家アンチャン氏がコーディネーター、通訳ではムティター氏のお世話になった。氏の日本語は完璧で、現地での意思疎通は格段に濃いものになった。

初日、まずアユタヤ県のバンサイ国立民芸センターを訪ねた。女王の肝いりで国中の30種の民芸を集め、実演、展示を行う。15歳以上の若者は手当て付で技術研修を行える。石鹸の彫刻やアートフラワー、ミニチュアのジオラマ制作等、今日的な分野もあるが、圧倒的に伝統民芸が面白い。200年前にタイにも普及したラーマナヤの踊りの被り物や仮面の制作では、木材や漆、にべ（魚の内臓の膠）や昆虫の羽根等、伝統的な材料とシリコンやセメント、アクリル塗料等、今日的な材料を取り混ぜ、30人近くの研修生が制作を行っていた。見学を傍目に、初め苦虫を噛み潰していた先生も大西氏の屈託のない質問に、蘭や竹を基にした伝統模様の原則からその象徴性まで、お話が止まらない様子であった。伝統絵画では漆や金箔で仏教作品を制作、優秀な卒業生はお寺の装飾や、外国人用のお土産づくりの仕事に就く。徹底的な模写が研修の基本だが、トレースは絶対にさせず、細部から全体まで自分の技量として習得を目指す。午後からは美術工芸国際センターを訪ねた。東北部、北部、南部まで数十の少数民族の伝統民芸、王室に伝わる金細工の技術や様式を再生した作品、伝統的な織物の展示と合わせて、著名な現代作家の工芸品やデザインが展示されていた。山田長政記念館を訪ね、チャオプラヤ川のボートでアユタヤの遺跡を楽しみながら川魚の料理を頂いた。

2日目は仏教美術館を訪ねた。近年の高僧の肖像や仏教シーンのデジタルアートなど、世俗化した印象に映るが、国民の95%が上座部仏教徒のタイと日本の大乘仏教の信仰のリアリティーの違いが印象的だった。ついでナコンパソンの陶芸家ボンラック氏のアトリエを訪ねた。1000年以上前からタイに伝わるセラドン焼を今も作り続ける（セラは石、ドンは緑の意）。昼食後、スワンサムプラン美術文化協会との交流会に出向いた。お固い意見交換会などなく、伝統音楽やアートフラワー、葦の細工など、近隣のおじさんやおばさんの同好会の様子、空き瓶の中で寄木細工やタバコの包装を組み立てる揚げ物屋台のおじさんもいた。手作りの郷土料理を車座で頂き、輪になってダンスを踊った。ここでも大西氏が気さくな人柄で人気者になっていた。

3日目はプラパトムジェイデイ寺院をお参りした。前日のボンラック氏が壺に描いていた巨大な仏塔があり、3層にわたり増築を重ねたもの。ついでラブリ県のカノン寺の影絵人形劇の見学に出かけた。南～東南アジアに広く伝わるものだが、7年前にカンボジアで世界遺産に登録、タイ

でも国の登録遺産にされている。お寺の支援で、楽奏、ダンス、舞台照明、人形制作まで、継承グループが運営されている。人形制作では型紙に合わせて牛の皮を線や点で打ち抜く。その作業が3日程度。お土産物は実際の演劇用と少し変えて作る。フォタランの古い町並みにあるレストランで昼食の後、ペブリ県スタッコ作家、トンゲン氏のアトリエを訪ねた。タイの人間国宝である。材料は石灰、砂、藁半紙、膠、地元特産の椰子の蜜など。作品は100年を経ると石灰が石に変わり、半永久的に永らえるという。氏の話は哲学的、地元の寺院の仏塔の先に鏡を付けたところ、鏡が燃えているように見えた。偶然なのか何かの意図なのか。環境が全て担保された時、良い物を超えて素晴らしい物が出る。作家以前に職人（アルチザン）であり、作る物は常に決まっており、国王に作る物と一般人に作る物は別にする。古いものを尊重する日本の職人も尊敬していると。先のボンラック氏と同様、経済的にも自立した作家だった。夕食後、県の芸術文化際に出かけた。折り紙のワークショップ、少数民族の音楽会、学生のオケやドタバタ劇、郷土の歴史資料の展示等の間に様々な屋台が出ていた。山間部の虫の料理など珍しい食べ物もあり、焼き芋や寿司、えのきベーコンなど近年日本から伝わったものも。

最終日はナコンパソン県、文化庁の美術工芸センターに出向いた。10分野の展示の内、半分が伝統工芸、国立民芸センターとも役割が重なるが、こちらは文化財の修復作業を中心に行う。いずれも修復の箇所が分るように直すルールがあると言う。伝統絵画、スタッコの他、螺細、寄せ木細工、パーライトンペールウッドウという特殊な飾り布、金工細工もあった。大西氏が各分野の様々な材料を手にして（時には舐めて！）、熱心に聞き取っておられた。

上記の行程で視察を終えた。今後、大西氏の詳細な報告やアンチャン氏との協働の取組に期待したい。かつてなじみの首都のチャイナタウン、料理店やマッサージ屋が今も健在であった。しばし忘れていたタイの優しい人達と交流、良い機会を頂いた。



バンサイ国立民芸センター



美術工芸国際センターのポップな展示



スワンサムプラン美術文化協会との交流会



スタッコ作家のアトリエ



文化庁伝統美術工芸センター

試み◎ 回り路地の町家

下京の長屋再生プロジェクトについては京町家通信や再生研総会でもお伝えしてきた通りだが、この3月末、5軒のうち1軒に最初の入居者、ケントさんを迎えた。カナダのお兄さんが立ち上げた事業の京都支局として事務所兼住まいの町家を探していたところ、さまざまな出会いの積み重ねで、この長屋の居住者となった。

ケントさんは小学生の頃、数年間北海道に暮らしたことがある。給食のシステムと自分の教室は自分たちで掃除するという習慣に日本文化の素晴らしさを感じた。大学では日本文化、とりわけ居住と庭の関係に興味を持ち、その後、日本への留学を果たす。所属した京都大学高田研究室では細街路の調査にも関わった。自身もまちなかの小学校の近くの路地にある町家に住み、実際に体験しながら研究を進めていた。

その頃からすでに特徴のある回り路地のこの長屋のことは知っていた。緑が多くていいところだなあ、と憧れていた。今回、仕事をする側として事務所を探していたところ、高田研究室の前田先生からあの長屋を再生していると聞いた。近くの通りで開催したイベントで大家さんに会い、入居者を募集していることを知る。すでに別の物件を検討していたものの使い方の制限があり、逡巡していたところだった。タイミングよく改修中の町家を見せてもらい、今のひとつに決めた。

5軒長屋のうちの今の住戸を選んだのは、奥庭に一本の木があったからだ。自分の体験、調査や研究を通じて、職住一致と庭とのつながりが町家の特徴とわかっている。この木を活かして自分の思いを反映した暮らしができるのではないかと、それが決め手だったという。

再生された町家を訪れてみると基本的な3室続きの間取りを踏襲したコンパクトな住まいとなっている。1階は仕事場、2階はプライベートにきちんと分けられている。1階は、常駐するスタッフや来訪者のことも考えてすべて板張りにした。ミセノマ以外は机と椅子をおいて、普通のオフィスのように使うつもりだが、家具はすべて落ち着いた木製、自然な感じが町家の風情にぴったりだ。

奥庭には、一本のイヌビワの木がある。1階から見るとあまり見慣れない感じの幹がずっと天に向かってのびており、シンプルな印象だ。訪れた友人は、庭に面したお手洗いの造りに感動するという。そういう細かい作業ができるのも作事組ならではの。ちなみにカナダでは2×4の住まいが主流で、職人さんが腕をふるう場面がないそうだ。土壁も庭も、職人さんの技術や工夫が町家を支えている。

とにかく庭を見ながら仕事をしたいので、どうやって机や椅子を配置すればスタッフと一緒に気持ちよく働けるのか、仕事もはかどるのか、自分で動き回りながらレイアウトを考えているところだ。動線も庭とのつながりを考えながら工夫している。通り庭側の壁にはスタンディングの机を置き、立ってパソコンが使えるようにしようというのが今のところの結論である。

急な階段が上がった2階は住まいの空間。床の間にはこれも不思議な出会いで手に入ったドラムセットがここに来るのを待っていたかのようにびたりとおさまっている。落ち着いたら昔の趣味が再燃しそう、そんな楽しみもある。奥の窓を開け放つと、1階からは窺い知れなかったイヌビワの浅い緑の葉が生い茂っており、実に爽快。初夏の風が部屋から路地の外にまですつと抜けていく。

路地側の窓からは大家さんの家が見える。路地にある植物は大家さんが手入れしており、日々、水やりの大家さんと挨拶をする。回り路地ならではの景色と住み方を十分に取り込んだ町家がある。

庭が完成する前に入居となり、今は庭師さんと相談しながら、町家にふさわしいデザインを一緒に考えている。そんなケントさんの唯一の不安は、夏の暑さ。自分はまだしもスタッフや来客が耐えられるかどうか、これからの課題である。

こうして幾つかの出会いとそれなりの年月を経て、ケントさんの暮らしが風や光の満ちる場所で始まっている。昨今、田舎でIT起業というスタイルが話題を呼んでいるが、そんな難しいことは言わずとも、新しい住み方が自然に京都の町の中で展開している。日本のテクノロジーにあわせたアプリの開発がケントさんのお仕事だが、仕事はハイテクでも仕事をする空間は人間に適したトラディショナルなところで、という。こんなケントさんの姿勢が多くの人々にも共有できれば、町家再生の道も若い力が引き継いでいけるような気がする。

実は筆者がケントさんに出会ったのも3年前の研究会、同じようなテーマをお持ちだなあと思っていた。見違えるほどすっきりと再生された町家で再会し（お目にかかるまでずっとケントさんのお兄さんが仕事を始める場所、と勘違いしていたのだが）、再生研の活動も年月を経て大きく実るのだと感じた。

<丹羽 結花（京町家再生研究会 事務局長）>



歳時記◎飛魚とウリ

七月は祇園祭。平成26年に150年ぶりに大船鉦は巡行復帰しましたが、お祭と言うより神事を続けてきた大船鉦が建つ四条町。この町内にある料理屋（矢尾定）の担当は、祭期間中、神功皇后のお供えに使う飛魚とウリの用意です。飛魚は、大船鉦の下水引一番の正面（今年復元新調されます）に一体、左舷に十一体、右舷に十一体と合わせて二十三体が躍動します。現品は～緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺繍～どう見ても「飛龍」です。四条町ではこの幕を納める箱の墨書より「飛魚」と呼ぶようにしています。神功皇后の三韓征伐時、帥船のまわりを飛魚が取り巻き道案内をしたと聞いています。それがための取材と思われれます。大船鉦が所蔵する幕類衣裳の中で最も人目を引きます。本品は緋羅紗の大幅裂地に本金糸にて下面から六分にわたって波濤をあしらひ、上面を飛魚が闊達に跳ねています。

お供えの飛魚は、細い筒状の逆三角形の断面を持つ体をしており、全長30～40cm。胸ビレは上端と下端が長くのびたV字状で、特に下端が長く水面滑走時に水中へ推進力を効率よく伝えられます。滑空時には胸ビレを広げ、グライダーのように飛び、海面すれすれを猛スピードで滑空します。これは主に、マグロ、シイラなどの捕食者から逃げるため、滑空距離は、100m位、風上に向かって飛びます。旬は初夏から夏、小骨の多い魚ですが、脂肪が少なく淡白な味で、開いた飛魚を天日で乾燥処理したものを供えます。毎日のお供えは取り替え、前日のお供えを焼いて頂きます。

飛魚をアゴと呼ぶ日本海地方では、鮮魚としてよりも練り物や出汁の材料として利用されることが多いようです。アゴを原材料とした「アゴチクワ」が有名です。九州地方では、飛魚のダシ入りつゆで麺が多く食べられています。

ウリは、おそらく中国から朝鮮半島を経て日本に入ったものと考えられます。平安時代には元旦に行われる歯固めの式という宮中の行事で、ウリの串ざしを供えたようです。ウリというと、すぐに奈良漬という漬物を思い出しますが、食生活の中で副食として、非常に大きな役割を果たしてきたのが漬物です。漬物は、我々の生活の知恵から生まれました。野菜が少なくなる冬の保存食として考案されたのでしょう。奈良の酒造りの酒粕を利用してウリを漬込んだ菊屋治左衛門という人は、なかなか味のわかるかつ商才に富んだ人であったので元来歯切れのよいウリを、べっこう色になるまで漬込んだ奈良漬は、多くの日本人が好んで古くから食べられています。

京都での奈良漬は、綾小路通烏丸西入南側にある田中長さんです。ビルとビルの上に堂々とした間口が広い、歴史ある店構えでしたが、その佇まいを今は見る事ができないのは大変残念です。

でも田中長さんのご自宅が大船鉦が建つ四条町にあり、大船鉦を乗り降りしたり、お祭のお飾りをしたりする会所（町家）として使わせていただけるのは本当にありがたいことです。今年の祇園祭が終わりましたら、ワールドモニュメント財団様、京町家再生研究会様、京町家作事組様、京都市都市計画局様、京都市景観・まちづくりセンター様などの多くのお力で会所の改修工事が始まります。

<佐々木 定寿（京町家友の会）>



大船鉦の主祭神
神宮皇后様の御神面のお飾り



前部下水引一番
緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺繍

報告◎春の例会 京町家友の会会長アトキンソンさんの講演会

友の会総会に引き続き、アトキンソンさんの講演会を4会合同で開催しました。京町家の再生、ひいては町並みの再生の意義を再確認する機会となりました。

アトキンソンさんの唱えている観光立国は、日本を訪れる外国人滞在者を戦略的に増やそうというものです。かつて経済大国と言われた日本ですが、それはものづくりの技術や国民性のおかげではない、ある程度の先進国であれば、人口増によって経済が発達するというのは当たり前のこと。少子高齢化の現代社会において、もはや経済成長は望めないが、観光ならば日本にもまだまだ余地がある、でも今までと同じ施策ではダメ、というのが、基本的な考え方です。

どちらかというと観光産業や観光化にあまりよいイメージを持っていない私ですが、アトキンソンさんの言う観光戦略は今までの日本の施策と大きく異なっています。これまでは大量の観光客が来れば成功、という考え方が主流でした。国際的なイベントや大きなお祭があれば、観光客がたくさん来て、お金を落としてくれる、という錯覚が今も根強く残っています。たとえば先日の伊勢志摩サミット。サミットにより観光客が増えるか、ということはありません。前回のサミットがどこであったか（答えは洞爺湖）、そこへ行きましたか（当日会場でもその後に行った人はいませんでした）という事例でも明らかですね。

もう一つはどんな人にきてもらいたいのか、そういう人たちのために体制やサービスを整える必要があるということです。海外向けの日本のイメージが画一的なことも問題です。桜や着物ばかりでは旅行者も飽きてしまいます。たとえば、旅が好きな国民性といわれているドイツ人向けの工夫などを行っているのか、と言われると、確かに少ないですね。

今、日本が提案すべきなのは、もっといいところやいろいろな楽しみが日本にはある、とアピールすることだ、とアトキンソンさんは言われます。観光において重要なのは多様性。たとえば宿泊施設。最近は格安ホテルが当たり前になっていますが、ゆっくり楽しみたい、お金をかけてのんびりしたい観光客もたくさんいます。つい大衆化、多くの人向けのサービスに目を向けがちですが、本当の旅、本当のリゾートを求めている人たちに十分なサービスが提供できていない、ここに日本の観光の大きな問題がある、ということです。

さらに自然の美しさももっとアピールできる場所だとおっしゃっています。確かに私たちはイベントや「もの」に惑わされがちですが、そこにしかないものを求めるならば、それぞれの地域にある独特の風景こそ、かけがえのない財産ですね。

さて、京都はどうでしょう。京都の町並みもそんな独特の風景の一つのはずです。京都には社寺を中心とする世界遺産がある、と自慢していますが、その中心にあるまちな

かにはどこにでもあるような建物がどんどん増えています。観光のために、というのは何か特別なイベントや世界遺産を形だけ守るのではなく、私たちの住まい、暮らしが「京都」の基盤にあることを忘れてはなりません。京都に来て、泊まっても仕方がない、と思われるようになったら、観光客に人気の京都もあつという間にダメになってしまうでしょう。

もともとアトキンソンさんが京町家を所有することになったのは、ご自身の趣味であるお茶を楽しむためでした。どんどん崩れていく町並みを見て、どうこう言うよりも一つ所有してきちんと再生すれば、という気持ちだったそうです。そして京都がダメになると嘆く人たちに、そう言うよりも一つ所有して再生すれば、と勧められておられるとか。

町家を再生し、住むことは、ある意味京都に住むものの義務のようなものかもしれません。ともすれば長年住んでおられる方々、大きな商いをされている方々など、内側から京都は崩壊しているようなところがあります。経済性を求めているようで、本当の観光産業にはマイナスになっているというわけです。町家を維持できない、新しい建物が建てたいならば他所でやればよい、とまでアトキンソンさんはおっしゃっておられます。過激な言葉かもしれませんが、本当に観光によって経済効果を求めるならば、まず京都の人が京都を魅力的なところにしなければなりません。

古いもので我慢するものではありません。ご存じの通り、再生研は保存ではなく、今の時代にあう伝統木造のきちんとした暮らしを再生できるのですから。町並みを美しくしながら快適な暮らしを維持することができるのです。それが経済効果につながるのであれば、ありがたいことですね。

講演の終了後は、懇親会で大いに盛り上がりました。終了時間がきてもなかなか解散とはならず、アトキンソンさんとの交流を始め、4会それぞれの課題を議論することができ、とても充実した一日でした。

<丹羽 結花(京町家友の会 事務局)>



*実施概要

日時：平成28年5月8日(日)
場所：京都大学百周年時計台記念会館 国際交流ホール
友の会第17回定時総会 13時から
講演会 13時45分から
懇親会 15時45分から
終了 17時

改修事例◎愛車を仕舞う町家の改修：出町柳An邸

左京区

設計：末川協建築設計事務所 施工：辻工務店

昨年の10月出町柳の町家の改修の相談に出向いた。購入を検討されている施主が工事の概算費用を知りたいとのこと、辻親方と事務局の森さんの3人でお会いした。不動産屋さんも同席で、買うことは決心されているご様子、購入費用と改修費用のローンを組むのに3日後に図面と内訳が必要とのお話であった。実測調査を行う時間もないまま、設計図書を作成することになった。お話を聞くとオモテの増築の洋室を撤去、間口4間の1階をぶち抜いて車を3台収納したい、駐車スペースと一続きの土間にLDKも設けたい、水廻りも新しくしたい、2階4室の天井もとって、直天やロフトにしたいとのことであった。ローンを組める上限の金額は決まっており、その枠内では「2階と水廻りは諦めて」「増築は無理」「構造上抜ける柱と壁は今後、検討が必要」と念押しした上で、不動産屋さんのポンチ絵を元に図面と見積もりを作成し工事契約に至った。一方依頼者のAn氏が描かれたパースのスケッチは綺麗で気持ちが入っており、夢の実現をお手伝いしたい気持ちも固まった。An氏は昨年、郷里の福島から京大の研究職に転職され、京都に住むなら町家、車と一緒に暮らせる町家を探し続けておられた。

果たして2週間後ローンが決定、そこからが実施設計となった。建物の調査の結果、何本か柱が下っているものの軸組や屋根は健全で一安心、建物の立ちと矩は築造時からややおおらかな造り、2階別々の4室はもと京大生の下宿用とも思われ、左京区に残された町家ならではであった。

An氏もやる気まんまんで、1,2階を繋ぐ吹き抜けや、清家清（せいけ きよし）風の可動畳床、ガラス貼りの浴室等のアイデアを持って来られた。そして2階の改修も水廻りの改修も全然諦めておられなかった。工事費は材料と手間で決まるもの、設計からのその都度の概算提示で「奥さんのヘソクリはないんですか？」「車を売ったらどうですか？」等々、不躰な切り返しにひるまれることもなく、楽しい設計の打合せが続いた。とはいえ車の収納1台分は諦めて、オモテの洋室は残すこと、左官のこそぎと中塗り仕上げはすべて施主の施工とすること、キッチン、SK流し、洗面化粧台、湯沸し器は既存の再設置、浴槽はサラにするもののシャワー付混合栓や追い炊き配管、暖房器も再利用、既存の床や天井板も活けコボチで出来るだけ再利用する、使える建具は全て使う等、コストの削減目標が決まった。

設計の肝である町家への車2台の出し入れでは検討が要った。ヒトミ梁の成が1尺2寸、間口2間の開口はOKと判断した。ただし、2台目の車の出入りのため、1階洋室入り口脇の柱も抜く必要があり、それに瀟洒なモルタル製の庇の腕木が架かっている。柱を切って胴差で受けるにも相手の柱もない。ヒトミ梁から枺材を吊る束一本で胴差も吊る。面外の変形は枺材の成で持ちこたえる。机上で設計は出来てもAn氏に伝えるまで1週間考えた。「工事中に庇が落ちたら諦める」「洋室の壁にクラックが入ったら庇は落す」「将来2階オモテの床が下るならつかい棒を設ける」、インフォームド・コンセントと合わせて図面をお渡した。図らずも「町家構造事始」をお会いする前から丹念に読んでおられ、こと構造に関しては全幅の信頼を頂いていた。ローンの1.5倍の見積もりとなったが年内に実施図面が完了した。

そして今年の初めから工事着工、解体では小屋裏からは立派な小屋組が現れたが、床下からも立派過ぎる基礎石や東石、RCの基礎が現れた。1階すべてを土間にする工事、予想外の撤去作業となった。2階大屋根下地に断熱材と杉板を貼る最中、An氏のご長男、ご次男と壁のこそぎに取り組みされる中、1月14日に記録的な大寒波がやってきた。1階全部土間は「寒いですよ」とお伝えしていたものの、さすがに東北出身のAn氏も考えを改め、2階から浴室に直接降りる階段がほしいと。建物オクの吹き抜けを南北振り替え、階段を追加することになった。決心も早い動きも早いAn氏、すぐにネットオークションで箱段を購入され、それが階高に足りないとなるとすぐに継ぎ足し用の箱段を購入された。

土間のRCを打つ直前にキッチンの移設先が本決まりになった。洋室の柱を胴差で受け替える工事も無事完了し、辻親方がお守り代わりに箱段横に先の改修で抜かれていた柱を補ってくれた。最後までこだわりのAn氏、洋室の玄関と通路の壁を抜いて建具にしたい、前栽の掃出しに引込みの内障子を設けたいなど。すぐに井川さんで古建具を調達された。

果たして4月の末に工事完了、検査担当の木下理事長からは「何を検査すんの？」と言われるほど、仕上げ工事の少ない改修であったが、An氏にはご満足いただけただよう、5月末には多くの職方をねぎらいの会に招いて頂いた。引渡し時にがらんとしていた土間にいっぱいいっぱい愛車が並んでいる様子を改めて、施主の町家へのこだわり、車へのこだわり、それを両立できる町家の懐の深さ、そんなことを学ぶことができた改修であった。

<末川 協（京町家作事組 副理事長）>



外観



吹抜からの見下ろし、愛車2台、移設後のキッチン



前栽に面した浴室

町家再生再訪 その1 ● **建田邸** (設計:アトリエRYO 施工:安井壺工務店) <後編>

町家暮らしにまつわる悩みとして、駐車場の問題とねずみの問題がある。建田さんも一時は建て替えを検討されていたが、駐車場のために町家の伝統的な住空間を潰すという選択はせず、コインパーキングを利用されている。町家の基本的なかたちを活かす再生を選択され、町家に対する意識や生活の質感はどのように変わったのか伺った。

●瑞々しい住空間へ

(理恵子夫人) 改修前2階には誰のものかもわからない長持ちや仏壇があって、嫁いできてから一度も足を踏み入れたことのない部屋がありました。TBSの筑紫哲也さんの番組の取材で加藤周一さんが取材にみえたとき、突然「改修してどうか」と聞かれて、「爽やかにになりました」という言葉がぼつとでてきたんです。嫁いできた者ということもあるでしょうが、改修前は何か気が滞っているような感じのするところがありました。

設計が木下さんでなかったらこうはなつてなかったと思います。生きている沢山の人生を家を通してみてきた蓄積がおりなんですね。お風呂の色でも、私ははじめ白と緑をイメージしていたので「お風呂はピンクですね」と言われて驚きましたが、実際のところ健康的な気分になれて納得しアドバイスに感謝しています。忌憚なく話し合える設計のかたは必要です。

去年大谷孝彦さんの奥さまから頂いた『京町家の空間イメージ』という小冊子を読んで、本当にそうだなと思いました。京町家の暮らしと「空間性」の関係、その空間のもっているものをできるだけそのまま大切にしていって住みやすくする、そのバランスがだいじなんですね。そして、中まで信じられる素材でできていること。素材が呼吸をしていること。この家で育った息子はいまマンション住まいですが、洋服にカビがはえるとは思いませんでした。

在宅終末医療に取り組んでいらっしゃる徳永進先生が仰っていました。「伝える」と「伝わる」ことは違う、と。安易に言葉を使うと本質から離れ形骸化する。それと同じように、町家は本来住むためのもの、住んでいてこそ、のものだと思います。

●かたちの生命

(木下) この夏京都で開かれる考古学の大会は、世界の考古学者に町家を知ってもらう良い機会になると思います。縄文時代の木や土の作品はシンプルで美しい。縄文時代やアポリジニ社会の研究をされている小山修三先生は女性の土偶のお尻を「触らないかん」と言いますよ(笑)。何のために作ったのか、呪術なのか、祭事、信仰、畏れ、祈り、こわいものの表現なのか、どのように形を思いついたかわからない昔のものが、思いもかけないかたちで決まっている。

(建田) 若狭三方縄文博物館で鳥浜貝塚の出土品を展示しているのですが、木のお椀に漆を塗る工程で弁柄をすりつぶすところから刷毛で塗るところまでビデオ撮りの手のモデルをしたことがあります。再現するのにその刷毛に当時何の毛を使っていたのかわからない。「熊の毛」と書かれた文献もあるようなんですがよくわからない。ただ、そこにあるものを最大限に利用する工夫があって出来たということは確かです。妻木晩田の弥生時代の木製品の復元をした時には、その完成された美しさに打たれました。当時の人が仕事そのものを楽しんでいたからこそ、と感じましたが、その時ふと改修のときの大工さんたちの様子を思い出しました。

●改修から15年を経て

(理恵子夫人) 改修から15年経ちましたが不具合はほとんどありません。日ごろの手入れは、これといって何もしてなくて、ひと月半に一度ランプシェードと梁をふくだけ。毎年床暖房をシミズ工業の方に見てもらっていますが、あとは床の漆を塗り直したくらいです。

(建田) フローリングに漆を塗りたいけどかぶれないかが心配で、大工さんが見に来られたことがあったね。やはり見てもらうのが一番で、いまも90平米くらいの注文が来ています。

(理恵子夫人) この15年で周辺環境の変化はあります。当時は、改修して町家を残すということで町内の皆さんがとても喜んでくださった。今は、営利目的の安易な改修には皆さんとても厳しいです。この限界もあつという間に何軒もの家を買われて「京町家風」ゲストハウスや民泊になってしまい、住み難くなったと感じます。お互いに各々何もかもよくよくわかって暮らしていた路地の一部が民泊になってしまったりすると、ほんとにざわざわと落着きませんね。町内のおうどんやさんも閉店してしまわれたし、今のような「経済効果」中心の観光を続けていたら、そのうち京都全体が、住んで居るひとのいない、生活しているひとのいない街になってしまうのではないかしら。

気になるネズミとの共生についても伺いましたが、「家は猫がいるからネズミには困りません」と理恵子夫人。去年三和土の土間に蛇(!)がでたときも猫が闘ったそう。爪とぎで柱が傷だらけになるのではと心配したが、爪とぎは暖かいキッチンの床にある桐の木片で心おきなくしている。柱の小さな爪痕はお子さんの身長を刻んだ成長の記録と一緒に残る。

建田さんの木工藝のための場所は2階の仕事部屋にとどまらず、お子さんが巣立ったあとの空き領域へと進出していつている。仕事机の裏の室のなかに注文製作のものすごく軽いメガネが保管されていたり、大学の学生さんの作品が廊下においてあったりと、表情に富み楽しい宝箱のようだった。

改修前には足を踏み入れたことのない納戸も、広さと高さが確保され、ゆったりと美しい寝室になっていた。改修から15年を経て、現代の生活が建物の年月の重みに溶け込んでいく様子が何ともいえず魅力的だった。古くなって傷んだ建物を壊し建て替えるのではなく、日々の暮らしを見直し、美的歴史的価値と機能性をあわせもつ住宅に再生することができれば、地域の住環境も安定し保たれていく。

(聞き手:作事組事務局 森珠恵)



通り庭の奥の渡り廊下



新しくなった水回りにもガラス瓦を透して日の光が差し込む。

interview — 京町家に移り住んで ● 岩根・中村 邸

今回は上京区のとある路地のお宅。画家の岩根利江さんと建築士の中村侑介さんが共同でお住いになっているとのこと。お話を伺いました。

聞き手：城幸央（京町家情報センター事務局）

城：町家に住まわれたいきさつは何ですか？

岩根：絵を描く場所が欲しくて、広くて明るいアトリエを構えられる家を探していました。そこで、友人が住んでいたこの家が空くことになって紹介されたんです。ただ、逆にちょっと広すぎて、どうしたものかと。

中村：私はこの春まで東京にいたのですが、京都に来ることになり家を探そうとしていたところ、岩根さんから一緒に借りないかと持ちかけられまして、即答でイエスと返事をしました。

城：家もまだ見ていないのに即決ですか？

中村：いやいや、その友人というのが共通の友人でして、この家に遊びに来ていたんです。

城：なるほど、そういうご縁があったのですね。実際に住んでみていかがですか？

岩根：住みやすいですよ。共同生活の方もまあまあ上手くいってます。お互い異性と意識していないんでしょうね。

中村：...

城：町家に暮らしてみても何か感じることはありますか？

岩根：あ、開放感があるので気持ちいいです。特に今の季節はいいですね。制作も順調です。

中村：この家をご覧の通り長屋建てで、そんなに良い造りとは言えません。それに前の前の住人の方がかなりざっくばらんに改修しちゃいまして、畳は合板に変わっちゃいましたし、町家の風情なんかは残っていません。ただ、今はこのラフさが気に入っています。

岩根：私もそのあたりは同感で、思い切って絵を描いています。家に手を入れるのは許されているので、今後は少しずつ伝統の綺麗なところを入れて作り直していてもいいかなと思っています。

中村：自分たちの身の丈にあった暮らしができていえるのでしょうか。早く庭は整備したいですね。

城：美しい町家暮らしはもちろん大事ですけど、自分たちが心地よくいられる暮らし方っていうのが見えてくるようなこないような。

中村：確かに、のびのびと生きていける家のヒントが町家にありますよね。

岩根：私はずっとマンションに住んでいましたが、どうも窮屈で。壁が少ないからなのかなあ。建具ばっかり。そうだ、障子紙貼り替えなきゃね。

中村：建具を移動すればいいから融通はきくよね。建て付けも直さなきゃな。

城：この家は路地にありますが、ご近所付き合いはどうですか？

岩根：めっちゃ大変です。特にお隣さんが。。。

中村：あの、気がきく？お節介なおばちゃん、お話好きなんです。

岩根：2年間半のマンション暮らしでの訪問者数をこの2ヶ月であっさり抜き去りました。

中村：人との関わり合いが町家暮らしの本質なんでしょう。

岩根：大家さんはめっちゃいい人ですよ。お家賃渡す時に必ずお菓子くれますし。

城：どうもありがとうございます。お二人の益々のご活躍を期待しています。



長屋外観



生活風景

●事務局覚え書き

6月4日には京町家再生研究会シンポジウム、5日には「住みたい町家を探しに行こう」を開催しました。シンポジウムでは、京都市に提出した「京町家流通に関する要望書」をテーマに熱いパネルディスカッションが行われました。「住みたい町家を探しに行こう」も盛況で参加者33名の皆さんと5物件の空き町家を巡りました。雨上がりで蒸し暑い中、長い距離を歩き、参加者の皆さんはお疲れ様でした。次回は秋頃に開催予定です。是非ご参加下さい。

(京町家情報センター事務局 城 幸央)

オーナー登録数：延220

ユーザー登録数：延1524

物件登録数：延1542

成約件数：延198 (2015年6月10日現在)